

国連に設置された「環境と開発に関する世界委員会(ブルントラント委員会)」が1987年に発表した報告書『われら共通の未来(Our Common Future)』では、持続可能な発展を「将来の世代のニーズを損なうことなく、現在の世代のニーズを満たすことができる発展」と定義しています。その後1992年にブラジルのリオデジャネイロで開催された地球サミットで、21世紀に向けて「持続可能な発展」を実現するための世界の行動計画として「アジェンダ21」が採択されました。環境問題に関連した最近の世界の取組みは、この「アジェンダ21」に沿うもの、すなわち「持続可能な発展」を志向するものとなっています。

当社は自然環境に対する配慮、化学物質に対する安全の確保、資源の有効活用(ソースリダクション)の三つに重点を置き、地球の持続可能性を求めた企業活動を今後も続けていきます。これに加えて21世紀のキーワードはエコ・エフィシエンシー、環境効率です。エコ・エフィシエンシーは以下の式で表せます。

$$\text{エコ・エフィシエンシー} = \frac{\text{品質・機能・サービス}}{\text{環境負荷}}$$

商品の品質・機能・提供するサービスを、商品が全ライフサイクルにわたって環境に与える影響すなわち環境負荷で割ることで求められます。この分母が商品を開発・製造・販売するためのコストであれば、コスト・エフィシエンシーとなります。コスト・エフィシエンシーとエコ・エフィシエンシーの両方を継続的に上昇させていくことを21世紀における富士フィルムの環境活動の基本に置きたいと考えます。

富士フィルム商品とそれを作り出す生産活動をできるだけ、環境負荷を削減しリデュース、リユース、リサイクルできるものに変えていくことを目指します。富士フィルムの企業理念としているI&I(Imaging & Information)、すなわち画像と情報に関する商品を常にエコ・エフィシエンシーの向上を目指してお客様に提供し続けることが、地球環境において持続可能な発展につながる企業活動であると考えます。研究開発から廃棄に至るすべてのプロセスにおいてエコ・エフィシエンシーをどのように向上させていくかを、富士フィルムは求め続けていきます。

当社が従来から行ってきたエコ・エフィシエンシーの向上の取組み例を、以下に紹介します。

### 1) 写真感光材料で使用する銀量の削減

当社はこの20年余りの間に、カラーネガフィルムで使用する銀の量を半分以上に、またカラーペーパーで使用する銀の量を約3分の1にしました。もちろん使用する銀の量の削減は、製品の性能を向上させつつ達成されています。写真感光材料は、硝酸銀とハロゲン化合物をゼラチン水溶液の中で反応させて作られますが、用いるハロゲン化合物の種類や反応溶液の混合のさせ方、あるいは温度やゼラチンの種類、ごく微量の添加物などによって、写真の性能が大きく変わります。このような多くの要因を最適な処方でも組み合わせることにより、少ない銀量で優れた性能の写真感光材料を生み出しました。

### 2) カラープリントに必要な現像液量の削減

当社はこの10年余りの間に、写真の現像液量をカラーネガ現像で半分以上に、またカラーペーパー現像では5分の1に減らしました。これらも写真感光材料や現像液の成分組成と、現像用機器の性能との組み合わせを総合的に評価し改良してきた成果です。これにより写真現像廃液の量も大幅に削減しました。

### 3) 「写ルンです」の省資源設計

「写ルンです」は発売以来、ボディの薄肉化・小型化などの設計改良を継続的に実施しています。現在の製品は初期のものに比べ約半分の重さです。

当社はこうした「ソースリダクション」の施策に加え、環境配慮設計の観点に立って、エコ・エフィシエンシーの高い製品作りを目指しています。